



Calligraphy

部活動に
学ぶ！

小澤有貴 先生
Ozawa Yuki

江戸川学園取手中・高等学校
書道部顧問

取材・文：ONETES 野尻幸義
写真提供：江戸川学園取手中・高等学校書道部

筆の先にある“自分らしさ”

— 書道部で培う、表現力と協働性

音楽に合わせて大きな筆を動かす書道パフォーマンス。

静かに作品と向き合う展覧会作品制作。

一見すると異なる活動のように思えますが、その根底には「自分を表現する楽しさ」がありました。

今回は書道部顧問の小澤有貴先生に、活動への思いや、生徒たちへの願いについて伺いました。

「書道って楽しい！」を伝えたい

— まず、書道部について教えてください。何名くらいの部員で活動されているのですか？

中高合わせて25名ほどです。書道教室に通っていた生徒もいれば、学校の授業だけやっていた生徒もいます。小学生の時に書道を一度辞めても、「またやりたい」と戻ってくる生徒もいます。

— 週にどれくらい活動されているのですか？

週3日です。週2日は書道パフォーマンス、もう1日は展覧会へ向けた作品制作を行っています。私は「書道部は展覧会に作品を出す部活」と考えているので、作品制作は大切にしています。ただ、パフォーマンスにはまた違った魅力があるんです。

— 展覧会や書道パフォーマンスはどのくらいの頻度で出展されているのですか？

展覧会には少なくとも年に4回は出品するようにしています。展覧会それぞれの制作期間を考えると、パフォーマンスは多くても年に3回くらいになります。

生徒のやりたい！から始まった書道パフォーマンス

— 書道パフォーマンスを始めたきっかけを教えてください。

現高2生たちが、中学1年生の頃に「書道パフォーマンスをやりたいです！」と相談にきました。

— 先生ご自身は、書道パフォーマンスの経験があったのですか？

実はまったくなくて(笑)。やったことも、指導したこともありませんでした。ですので最初に「なぜやりたいのか？」「どんな作品を作りたいのか？」など、生徒たちに思いや考えを紙に書いてもらい

ました。それを見て、「粗いけど磨けば素敵な書道パフォーマンスになる」と思い、始めることにしました。

— 書道パフォーマンスの曲選びや演出は先生が考えているのですか？

いえ、基本的にはすべて生徒たちです。選曲、振り付け、書体、文章、配置、作品に込める思いまで、生徒たちが考えています。私は、生徒たちが「やりたい」と思ったことを実現するのが教員の役割だと思っています。

— 音楽に合わせて書くのは難しそうですね。

タイミングを合わせるのが大変ですね(笑)。自分のペースでは書けないので。でも、一つの作品をみんなで作り上げることで、協調性やチームワークは大いに育ってきていると思います。書道は本来、自分自身と向き合う時間が多いのですが、書道パフォーマンスは“みんなで一つの作品を作る”ため、協力がとても大切になります。「相手が今どう動いているか」を見ながら動く必要があるので、最初は自分のことで精一杯だった生徒たちも、「次に書く人が動きやすいようにしよう」や、「全体がきれいに見えるようにしよう」などと考えられるようになっていきます。作品が完成した瞬間、「みんなで作り上げた」という達成感が強いので、生徒たちも非常に良い表情をしていますね。



「書写」と「書道」は違うんです

— 私自身は小学校から高校まで書道の授業を受けてきたのですが、小・中学校と高校の書道の授業は違うものなのですか？

小・中学校の書道は、国語（書写）であり「文字を正しく整えて書く」ことが目的ですが、高校からは“芸術”としての書道になるんです。高校書道では古典作品を学び、その技法や表現を理解したうえで、自分の表現につなげていきます。

— “自己表現力”を養うんですね。

そうですね。書道は、ただ字を書くものではなくて、その人らしさが出るんですよ。

— 先生ご自身、書家として今も活動されていると思いますが、書道のどんなところに魅力を感じていますか？

私は書道史や中国史を学ぶのが好きです。時代によって使用する用具・用材や字形が違うことなど、書家それぞれの書風を学びその背景を知ることが面白いですね。「この時代にこの文字が生まれたのはなぜ？」と考えると、書道の楽しさにつながると思います。

— 先生ご自身が、今も探究されているんですね。

はい。生徒たちにも興味や関心を持って活動してほしいので、外部の展覧会に足をはこび現代書家たちの作品を鑑賞する機会を設けています。また、美術館所蔵の古典作品も紹介しています。

書道が育てる「心の豊かさ」

— 最近はデジタル化が進んで、文字を書く機会も減っていますよね。書道の大切さも大きくなっていると感じていますが、先生はどう思われますか？

文字を書く機会は減っていると感じます。だからこそ、手で書くことを大切にしたいですね。

— 授業でも、先生が指導する中で意識されていることはありますか？

はい。中学書写では硬筆でお世話になっている人へ感謝の手紙を書いたり、高校書道では色紙に一文字書で感謝を伝えたりもします。どちらも文字を書くことは相手を思い、相手の立場に立つて考えることでもあります。だから、書道を通して



部活動に学ぶ！



小澤 有貴 先生
江戸川学園取手中・高等学校の教諭（芸術）。小学生から書道教室に通い、書道の奥深さに魅了される。現在は教師として生徒たちを指導する傍ら、書家としても作品を制作している。専門は隷書。

“相手の立場に立って考えられる人”に育ってほしいと願っています。

— 書道は、やはり人間形成にもつながっているんですね。

そうですね。技術だけではなくて、心も育ててくれるものだと思います。

— 最後に、受験生たちへメッセージをお願いします。

書道は「上手じゃないとできない」と思わなくて大丈夫です。興味を持つことや、“やってみたい”と思うことが一番大切なので、ぜひ挑戦してほしいですね。

書道部員へアンケート

入部のきっかけを教えてください。

（小学校のころから書道習っていて）筆で作品を書くことが好きで、書道部に入りました。また、書道パフォーマンスがやりたくて書道部に入り、私たちの代から書道パフォーマンスを始めました。

書道の良さや楽しさを教えてください。

中国の古典作品を学ぶことが楽しいです。私は特に王羲之の筆法を真似したり、作品に触れることが好きです。自分の書きたいものを自分で表現でき、伝えることができるのが書道の魅力だと思います。

書道の難しさを教えてください。

臨書をするときに、書家の特徴や良さをきちんと理解して、自分で書けるまで続けるのが難しいです。パフォーマンスのひな形制作をする際に、どういった字体で書くか、伝えたい思いは何かなど自分たちで一つひとつ考えていくことも大変です。

書道部の活動を通して身についたものはありますか？

自分から意見を出したり、部員たちをまとめる力や積極的に先生にわからないところを聞きに行くことができるようになりました。また、挨拶、思いやり、敬意などの礼儀をもつことで相手の立場に立って考えることを強く意識するようになりました。

書写と書道で基本的な技術や古典作品から知識を学び、自己表現力を養っていく。また書道パフォーマンスでは、仲間とともに一つの作品を作り上げ、協働性を学んでいく。書道部には、自分を表現する楽しさと、人として成長できる学びがあります。

